

17	刈谷	刈谷市立雁が音中学校	キクチ シュンヤ
			名前 菊地 惇也
分科会番号	特	分科会名	特別の教科 道徳 ()

自分の判断を行動に移そうとする生徒の育成

— 2年 切実感をもって仲間と話し合う道徳の学習を通して—

1 生徒の実態

本学級には、仲間の意見に共感の姿勢を示したり、人の行動のよさを認めたりする温かい雰囲気がある。帰りの会にその日の印象的な出来事を共有する際には、仲間の優しい行動を受けて自分がどのような気持ちになったのかを意識して伝える生徒もいる。一方で、普段の授業や生活を覗いてみると、自分が正しいと思うことを他者に言葉で伝えたり、行動に移したりすることを躊躇する生徒がいる。勇気をもって発言をした生徒に発言をした理由を問うと、「〇〇さんが助けてくれたから」と答えたことがあった。ここから考えられるのは、その生徒の発言に至った理由は「仲間の支え」であった。つまり、「自分が発言して、学級に貢献したい」とか「発言できる自分でありたい」というように、自分自身の責任で判断し、行動しているのではないと考えられた。そこで、教師の見取りと生徒の感覚のずれを確認するために、本学級の生徒に心の在り方アンケートをとった。また、その結果を参考にしながら生徒一人ひとりに聞き取りを行った。そこでもやはり、自律した判断や行動をできる生徒と正しいと分かっているにもかかわらず行動を躊躇する生徒が混在していることが明らかになった。正しい判断ができてなかなか行動につなげられない生徒たちが、行動に移す強い心の大切さを本気で考えて欲しい。また、そこで得た心を準備するということをこれからの生活での成功体験に変えていって欲しいと願いを込め、本実践を行うこととした。

2 研究内容

(1) 目指す生徒像

- 道徳的問題に対して、切実感をもって考える生徒
- 自分で判断したことを行動に移そうとすることができる生徒

(2) 研究の仮説と手立て

仮説1 道徳的問題に対して、自分事として捉えることができれば、切実感をもつことができるだろう

< 仮説1に対する具体的な手立て >

- ① 子どもたちにとって実際にした自分の体験を取り上げることで、自分事として捉えることができる。(アンケート)
- ② 子どもたちにとって、身近な教材を出合わせることで、切実感をもって考えることができる。(教材登場人物の心情理解)

< 仮説2に対する具体的な手立て >

仮説2 他者の判断方法についての考え方に触れながら心の準備について考えれば、自分で判断したことを行動に移そうとすることができるだろう

- ③ 話し合う場を設定したり、ねらいに迫るために切り返しの発問をしたりすることで、自分の判断の方法についての考えを広げようとするすることができる。(切り返し)
- ④ 自分の判断を行動に移すために必要な心の準備について考えさせたり、授業の終末に学習を振り返る時間を確保して学びの感想を書かせたりすることで、自分の判断を行動に移そうとすることができる。(心の準備を考える)

(3) 抽出生徒について

< 抽出生徒Aの実態と願い >

- ・ 普段の生活から、誠実に行動したいという意志がある。
- ・ 自分の判断に自信が持てないことが多い。
- ・ これまでの生活の中で、自分で正しいと判断したことに対して、行動に移すことができた経験が少ない。
- ・ 仲間の考えとの関わりを通して、自分の考えを再構築することがほとんどない。
- ・ 教材のできごとを自分事として捉えていない。



本実践を通して、道徳的問題に対して切実感をもって考えさせたい。また、仲間の考えに触れることで、自分の考えを広げ、自分の判断を行動に移そうとする姿を期待している。

3 研究の実際

ここからは、「カラカラカラ」 中学2年 きみがいちばんひかるとき (光村図書)の教材で行った実践をもとに検証していく。

(1) 教材について

主人公の達也は、友人が駅のホームにゴミを捨てているのを見たり、電車内に置きっ放しの空き缶が気になったりしても、周囲の反応を気にして行動に移すことができない。しかし、達也は空き缶を自分が捨てた方がよいということは理解してい

る。このような誰にでもあると思われる体験の話を通し、主人公の葛藤と自分自身との共通点を重ね合わせながら考えさせたい。また、迷いなく空き缶を拾い上げた男性と達也の心の在り方や行動指針の違いに目を向けることで、行動に移す心の強さを考えるために有効な教材であると考えた。

(2) 仮説1について

<手だて①の検証>

授業の冒頭で、心の在り方アンケート（手だて①）の結果を用いた。ここで、「正しいと思ったことをやれなくて、後味の悪い思いをした経験」があるのは教師だけでなく、学級の仲間も同様の経験があったことを知った。資料1にあるように、生徒Aもこの場で、登校中に困っている「外国人がいたが、手を差し伸べることができなかった」という経験を学級全体に共有した。教師がそのときの気持ちを問うと、「英語の塾に通っているのに、助けられなかったことを悔しがっている」ということが分かった。このように、学級全体で問題意識の共有を図った上で、「みんなこんな自分を変えたくない？」と投げかけた。生徒Aは、大きく頷きながら聞いていた。このような生徒Aの姿から、心の在り方アンケートを用いて、自身の経験を振り返ったり、仲間も同じような経験をしていると知ったりすることで、これから考えることに自分事として向き合うことができていることが分かる。

<手だて②の検証>

その後、教材文（手だて②）を読んだ。読み終わると、自然と学級から「あ～、電車の中での話か。こんなこと僕もあるわ」などという言葉が漏れた。しかしこの段階では、電車の車内という場面に対して、自分の経験を重ねているだけであると感じた。そこで、主人公の達也やまわりの登場人物の心情理解を行い、教材文の中にある困り感や悔しさ、もどかしさに学級全体が共感しながら、話し合いにつなげることにした。(資料2)こ

【資料1】授業記録

T	心の在り方アンケートに書いたことを教えて下さい。
S1	挨拶をしてくれた人に、自分が返さなくて申し訳なくなったことがあります。
S2	ボランティアに参加するべきと分かってはいたけれど、面倒くさくてやめてしまったことがあります。
A	登校中、困っている外国人がいて、その人に対して、2人の日本人女性が日本語で対応していた。その2人も困っていた。
略	
T	そのことについて、どのような気持ちになりましたか。
A	英語の塾に通っているのに、助けられなかったことに悔しきがある。一緒にいた従兄弟も同じことを思っていた。今でも悔しい。次はないかもしれない

【資料2】登場人物の心情理解表

	電車に乗る前	電車の中で	電車降りた後
伸一	チョコの包み紙をホームに捨てようとする。	空き缶を持った達也に、「そこら辺に置いておきなさい。まだいい子ぶるのか」と言う。	
達也	チョコの包み紙をホームに捨てる伸一に何も言えずに黙って見ている。	●一度空き缶を拾ったが、捨てられない。 ●「カラカラカラ」という音が気になる。 ●もう一度拾おうとしたが、やめる。	空き缶をゴミ箱に捨てた男の人の背中をいつまでも目で追いかけていた。
男の人		空き缶を拾って足元に置いた後、読書を再開した。	空き缶をもって電車を降り、ゴミ箱に捨てた。

の場面において、「迷いなく空き缶を拾い上げた男性を目で追っていたとき、達也はどのようなことを感じていたか」と発問を行った。すると、「もやっとしている」や「恥ずかしさを感じている」という意見がすぐに挙がった。しばらくして、生徒Aが挙手し、「どうしたら男の人のようにできるのかなって疑問のような感じで思っていると思います。」と発言した。(資料3) この姿から、生徒Aは主人公である達也の表面上の気持ちだけでなく、このような気持ちを抱かないようにするためにはどのようにすれば良いのかを潜在的に考えようとしていた。

【資料3】 授業記録	
T	迷いなく空き缶を拾い上げた男性を目で追っていたとき、達也はどのようなことを感じていたでしょうか。
S3	もやっとしていると思います。
S4	友達の言葉で、行動をやめた自分に対して恥ずかしさを感じていたと思います。
	略
A	どうしたら男の人のようにできるのかなって疑問のような感じで思っていると思います。
	以下、略

このことから、前段のアンケートで問題意識を共有し、自分事に捉えることができた生徒Aが、身近な教材文における問題を解決するための納得解を得ようと切実感をもっていることが分かる。

(3) 仮説2について

<手だて③の検証>

登場人物の心情理解の中で、達也が感じているいろいろな感情を系統別に板書し、後味の悪さを感じていることおさえた。その際、達也が後悔をしている感情に切り返し、「あのときこうしておけば」というように達也が過去(電車内)を振り返っていることを共有した。その場面で、「みんなが達也と同じ立場だったら拾えたか」を問い、読み物(第三者目線)から自分の生活(自分事)を考える流れをつくった(手だて③)。この場面では、多くの生徒が意見を交わせるように、グループで話し合ってから、全体交流へとつなげることとした。生徒Aは、グループでの話し合いにおいて、再度S5からの「自分なら拾えたか」という言葉に対して、「拾った方がいいってのは分かってるんやけど、その場面になると躊躇してしまう」と難色を示していた。しかし、S7が難しさを感じていないことに意欲的に触れ、他者の判断や行動の基準を取り入れようとしていることが分かる。(資料4) また、S8の考え方を聞けるように話を振り、

【資料4】 グループでの話し合い記録	
S5	実際、(自分なら)拾えた?
A	いや～、どうだろうな。 拾った方がいいってのは分かってるんやけど、その場面になると躊躇してしまいそう。
S6	分かる。友達の前で偽善ぶってる感じするよね
S7	そんなに難しいこと?
A	S7は余裕?
S7	まあ、僕は、良いことしたら誰かが見てくれているって思うから、拾えるかな。
A	そういう感じ? S8は?
S8	俺もあんまり、他人の言葉には左右されないかな。
A	すごいな。

【資料5】 話し合いの様子



「他人の言葉に左右されない」というS8の考え方にも「すごいな」と感心している様子が見られた。(資料5)このような生徒Aの姿から、話し合う場を設定したり、ねらいに迫るために「自分なら拾えたか」という切り返しの発問をしたりすることは、自分の判断の方法についての考えを広げようとするにつながったといえる。

＜手だて④の検証＞

グループでの話し合いでは、生徒Aの他にも、自分自身の判断基準や行動指針をもつことができていない生徒が多く確認された。そこで、学級全体に対して、「やった方がいいと決まっていることをやれるようにするためには、どんな心を準備しておくよいだろうか」と発問(手だて④)した。その際に、行動は正しいことは前提として押さえ、具体的な行動についての話が出た際には、なぜその行動が大切だと思ったのか理由を聞き、心の部分を強調することにした。生徒Aは、この発問に対して頷きながらワークシートを書き始めた。これは、事前に行ったグループでの話し合いにおいて、S7やS8のように自分自身の判断基準や行動指針をもつ必要感を感じていたからであると考えられる。全体での話し合いでは、S7やS8のような意見に加えて、「普段から正しい行動をとる練習をする」や「自分がやりたいことであると考え方を変える」、「今、何をすべきかを考えて行動する経験を積む」などという意見が出た。話を聞いていた生徒Aは、勢いよく挙手をして笑顔で「みんなの意見を聞いていて思ったんだけど」と前置きし、話し出した。「自分の目の前に自分がやった方がいいと思うことが現れたってことは、『自分にしかできないこと』なんですよ」。この意見に対して、仲間が「どういうこと?」と

問うと、更に生徒Aは「つまり、誰かが見ているとか、偽善とかじゃなくて、やった方がいいと思っていることをやり遂げるには、『これは、自分にしかできないことなんだ』って思えるような心の準備が必要なんだと思います」と続けた。学級が感心したような反応を見せた中で、教師が「そういう心の準備ができていれば、実際に行動できると思う?」と問うと、「少なくとも、これまでが経験してきた場面では、できたかもしれないと思います。」(資料6)と答えた。

終末には、これまでの自分の経験と重ねながら学習を振り返る時間を設定(手だて④)した。生徒Aは、外国の人が困っていた

【資料6】自分が考える心の準備を話す生徒A



【資料7】生徒Aの振り返り

●達也のような経験が、あった・なかった
●どんな? 外国の人が道を困っていたのに、助けられなかった。
●これからは?
あの場面は、「自分にしかできない!」と心を準備すれば、助けることができたし、気持ちよかったです。
これからは自分が正しいと判断したことは自分の目の前 = 自分にしかできないと思っこんで、強い気持ちで行動していくと決めました!

のに助けることができなかつた自分の経験に対して、「自分が正しいと判断したことは、自分の目の前＝（イコール）自分にしかできないと思って、強い気持ちで行動していくと決めました」と書いた。これは、資料4の段階では、自身の判断基準を抱いていない生徒Aが、S7やS8を含めた学級の仲間の考え方に触れ、生徒A自身の新たな判断基準や行動指針を見つけることのできた姿であると考えられる。また、「決めました！」という語尾から、判断基準や行動指針の獲得にとどまらず、これからの行動のつなげていこうとする強い意志が確認されたと考えられる。このことから、自分の判断を行動に移すために必要な心の準備について考えさせたり、授業の終末に学習を振り返る時間を確保して学びの感想を書かせたりすることで、自分の判断を行動に移そうとすることができたといえる。

4 成果と課題

< 仮説1について >

生徒たちは道徳的問題に対して、自分事として捉えることができたことにより、切実感をもつことができた。

授業の冒頭における生徒Aの姿から、心の在り方アンケートを用いて、自身の経験を振り返ったり、仲間も同じような経験をしていると知ったりすることで、これから考えることに自分事として向き合うことができていたことが分かる。また、自分事として捉えることができた生徒に、身近な教材文を出合わせたことにより、道徳的な問題を解決するための納得解を得ようと切実感をもたせることができたと分かる。

< 仮説2について >

生徒たちは、他者の判断方法についての考え方に触れながら心の準備について考えれば、自分で判断したことを行動に移そうとすることができた。

資料4のように、話し合う場を設定したり、ねらいに迫るために「自分なら拾えたか」という切り返しの発問をしたりすることは、自分の判断の方法についての考えを広げようとするにつながったといえる。また、自分の判断を行動に移すために必要な心の準備について考えさせたり、授業の終末に学習を振り返る時間を確保して学びの感想を書かせたりすることで、自分の判断を行動に移そうとすることができたといえる。

< 課題について >

本実践を通して、生徒たちは、自分の判断を行動に「移そうとする」実践意欲を獲得することができたが、その姿が日常生活に現れるまでには至らなかった。学んだことをすぐに行動に移すことは難しいことだと思うが、これからも道徳の学習を通して、日常生活で実践する力をつけることができるよう手立てを工夫していきたい。生徒たちがよりよく豊かな人生を歩めるように、日々の生活の中で場面や視点を与えながら、問題意識を継続したり、成功体験を積み重ねたりできるように支えていきたいと考える。